

## 古典和歌の解釈をめぐる——その意味内容を左右するもの——

### 一、「小倉百人一首」と所収和歌

#### ○「小倉百人一首」

一冊。和歌。鎌倉時代の秀歌選。藤原定家撰。別称「小倉山荘色紙和歌」「百人一首」。文暦二<sup>1250</sup>年五月の成立と見る説と、文暦二年九月以降家隆が没する嘉禎三<sup>1253</sup>年四月以前の成立と考える説などがある。ただし、現存伝本に記される「後鳥羽院御製」「順徳院御製」という作者名は、両院の諡号の決定が定家没後のため、定家自身の記載とは考えられず、両院の歌の選人などについては定家の子・為家による補正の手が加わっていると見る説もある。

#### 【成立事情について——】

「予本自不知書文字事、嵯峨中院障子色紙形、故予可書由彼入道懇切。雖極見苦事、愁染筆送」之。古来人歌各一首、自天智天皇以来及家隆・雅経」

「予本より文字を書する事を知らず、嵯峨中院障子の色紙形、故に予書くべき由、彼入道懇切なり。極めて見苦しき事と雖も、愁に筆を染めて之を送る。古来の人の歌各一首、天智天皇より以来、家隆・雅経に及ぶ。」

「私は、もとより書道が得意ではない。嵯峨中院の障子の色紙形を、ことさらに私が書くべきである、かの入道・蓮生法師は懇切に勧める。非常に見苦しい字ではあるが、筆を染めて和歌を記し、これを送った。古来の歌人の和歌をそれぞれ一首ずつ、天智天皇からはじまって、家隆・雅経にまで及ぶ。」

定家は、五月一日に蓮生の山荘の連歌会に招かれ、似絵の名手藤原信実とも同席しているから、その際にでも、山荘の障子に貼る色紙形和歌の揮毫を頼まれたのであろう。一方、右の五月より僅か二ヶ月前に『新勅撰和歌集』が成立している。後堀河院の命を受け、定家が単独で撰した『新勅撰集』は、歌数一二七四首を選入するが、後鳥羽院・順徳院の歌は一首も含まない。前関白藤原道家・摂政教実父子の要請で、草稿本に選入していた両院の歌など百余首を前年十一月に削除させられたためと考えられる。したがって『新勅撰集』は、完成はしても定家にとって不満の残る勅撰集であったと思われる。

〔日本古典文学大辞典〕より、項目執筆者：樋口芳麻呂

### ○「七」番「をむらび」歌の「こと」

出典：第五番目の勅撰和歌集『金葉和歌集』巻第八所収の四六九番歌

堀河院御宇艶書合によめる

中納言俊忠

四六八 人しれぬ思ひありその浦風に浪のよこそ言はまほしけれ

返し

一宮 紀伊

四六九 音にきく高師の浦のあだ波はかけじや袖のぬれもこそすれ

#### ※「艶書合」とは——

競べものの一つで広義の歌合の一形式。懸想文合ともいう。左右に分かれ艶書を合わせて優劣を判じ勝負を定めるもの。康和四<sup>1063</sup>年間五月二日と七日に行われた堀河院艶書合は有名。これは男方から女方にあてた恋歌と、女方の返歌とを合わせたもので、『金葉和歌集』『女郎花物語』『続世継』などにもみえ、後世『詞花懸露集』(艶書文例)とあわせて艶書の典型としてひろく流布した。

〔国史大辞典〕より、項目執筆者：中村義雄

## 二、古典和歌の注釈史

### ○「百人一首」の「古注」・「旧注」・「新注」

○江戸時代以前の文学研究——本文に「注釈」を施す作業が中心

「中世の百人一首注釈は、宗祇抄が中心であるが、これは百人一首の世界だけではなく歌学の世界全体に及び、古今集でも伊勢物語でも同じような傾向が認められる。しかるに秘事・口伝が中心の百人一首の注釈の世界も時の経過に従って、注釈そのものが詳細になり注の量が増えていく(中略)そうしたものの中心にあって、二条家流の注の範囲に入るものばかり、そうしたものの中心にあって二条家流の正統を継承した細川幽斎の百人一首抄(幽斎抄)が百人一首注釈書の権威として確乎たる地位を占め、江戸期前期の旧注の中心となる。」

「幽斎抄のあとを受け継ぐ地位に立つものは北村季吟の百人一首拾穂抄であろう。北村季吟は、幽斎の師事した松永貞徳の門流で江戸前期の古典注釈家として、源氏・枕・伊勢・土佐・八代集など龐大な注釈書を遺し後学への影響すこぶる大きかったことは諸家のひとしく認めるところである(中略)これより十年ほど後の元禄五<sup>1688</sup>年には、戸田茂睡の百人一首雑談、釈契沖の百人一首改観抄などの有力な新注が生れている。注釈史の上で、以上述べて来た秘事・口伝を軸に子弟相伝の中に育って来た注釈書を旧注と呼び、茂睡・契沖以降のものを新注と呼んでいるが、この新旧の区別は注釈する者の体質と態度とによって判断すべきで、年次によるべき性質のものでないことを明記しておきたいと思う。」

(中田宗作「百人一首の古注釈」(『国文学 解釈と鑑賞』49-1(2003)より)

※ 資料提供 香織

百人一首の成立——書写による流布／撰者・定家の存在——出版によるいっそうの流布・浸透

中世 鎌倉・室町時代 【古注】の伝来

近世 江戸時代

古注の発展・集成 【旧注】……より実証的・細密な 【新注】

七二番歌の注釈

○百人一首頼常聞書(古巻)

此哥堀川院艶書合哥也。たかしの浜のあた浪なみにはあらて波のやうに石のしろくみゆる也。そのやうにかりことをは袖にはかけし長思となるものといふなり。

○百人一首聞書(古巻)

此歌は 中納言利忠 人しれす思ひありその浦風に波のよるこそいはまほしけれ と云歌の返し也。あだ波とはあだ人と云心也。たかしの浜とはかくれもなく音に聞えたるあだ人と云義也。かけじやとは契りをさやうの人にはかけまじきとの儀なり。かゝるあだ人に契をかけたらばかならず物思ひと成べきと云心を袖のぬれもこそすれとは云る也。心詞かけたる所もなういひおほせたる歌也。あだ人にちぎる事は中くにいやと云う心也。聊よはき所もなく女の歌には一段可然面白歌云々

○百人一首幽齋抄(自巻)

堀川院の御時中納言利忠けしやう天の浦風ふみ合の時中納言利忠 人しれぬ思ひありそのうら風に波のよるこそいはまほしけれ 此哥の返し也。さてあた人と云心也。たかしの浜とはかくれもなく音にきこえたるあた人と云義なり。かけしやとは契をさやうの人にはかけまじきとの義也。かゝるあた人に契をかけは必物思ひと成へきと云心を袖のぬれもこそすれとはいへる也。心詞かけたる所なくいひおほせたる哥とぞ。聊かもよはき所なく女の哥にて心面白く侍る者也。

(以上『百人一首注釈書叢刊』第二・三巻より 和泉書院1995)

○百人一首拾穂抄(新巻)

※北村季吟筆

金葉集恋下に堀河院の御時艶書合によめる 中納言利忠 人しれぬ思ひありその浦風に波のよるこそいはまほしけれ返し此歌なり 堀川院艶書合に云内にて殿上の人々 哥よむときこゆるに宮づかへの人のもとにけさうの哥よみてやれと仰ことにて云々

中納言利忠は俊成の父也 高師の浜は和泉の国なり。あだ浪は御抄あた人と云心也。哥心は。この人はをどにきこえしあだ人なれば。かやうの人には契りをかけじ。もしもさやうのあだ人になれなば。中ぞらに物おもひとなりて袖をぬらすべければと也。あだ浪と云より。かけじや。袖のぬれもこそすれと云なり。御抄云。心こと葉かけたるところなく。云おほせたる哥とぞ。いさゝかもよはきところなくをんなのうたにておもしろく侍るもの也

(国文学研究資料館蔵『百人一首拾穂抄』)

○百人一首改観抄(新巻)

※契沖筆

金葉集堀川院の御時艶書合によめる 中納言利忠 人しれぬ思ひありその浦風に波のよるこそいはまほしけれ 返し歌なり。利忠ありその浦をもてよめればこれは高師の浜をもてこたへとす。高師の濱は和泉也。上句は世の中にかくれなくあた人といひさはかゝる人といふ心なり。さやうのあた人にはかりにもかけあはし。かけあはし思ひのたゆましきにといふ心を袖のぬれもこそすれと用意していふなり。波を袖にかけたらば常にほしわつらふへきことわりなり。源氏に

身をなけん淵もまことのふちならてかけしやさらにこりすまのなみ かけしやの詞これを本歌にしたるにや (以下略)

○『女郎花物語』(作書本巻)

※北村季吟筆か

女の道に心ざしある人は。親などに取まかなひて。縁につけ侍らば。とにかくに告げてあひ添ひ侍りなん。もし親もなく宮仕へしてあらん人などはこれかれ若き人々言ひ寄る事ありとも。大かたならん事などには軽々しく靡き侍るまじきわざにこそ。 (仮名草子集成八『女郎花物語』東京堂出版2003)

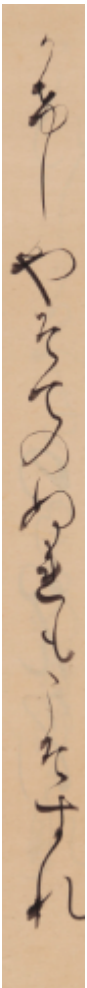
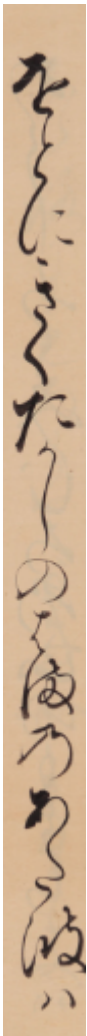
『百人一首注釈書叢刊』第一〇巻より 和泉書院1995

※

写本の字(へちま)字)を活字化して

波

おまけ



※ おまけ

※ 写本の字（ひょうご）を活字化する——解答

を 遠  
と 止  
に 仁  
き 幾  
く 久  
た 太  
か 可  
し 之  
の 乃  
は 波  
ま 満  
の 乃  
あ 安  
た 多  
波  
は 八



か 可  
け 希  
し 之  
や 也  
そ 曾  
て 天  
の 乃  
ぬ 奴  
れ 連  
も 毛  
こ 己  
そ 曾  
す 寸  
れ 礼

